

◇◇◇◇ 公教育は家庭教育に ◇◇◇◇◇◇◇◇ ◇◇◇◇◇◇◇◇ どこまで関与するか (4) ◇◇◇◇◇◇◇◇

ありふれた生活を 見直すことから

伊 集 院 理 子

今回、「公教育は家庭教育にどこまで関与するか」というテーマの原稿がまわってきて、はたと考えた。私は、それぞれの子どもが満たされて一日を過ごせるようにと、子どもとのやりとりを大事に過ごすことで手一杯で、普段はあまり意識せずにきたが、幼稚園教師として、「公教育」を施す立場にあるのだ。私のしている日々の保育活動が家庭教育にどのような影響を与えているのだろうか。又、一方では、子育て真最中の親として、目一杯「公教育」の恩恵に預っている立場にもある。我が家の家庭教育に公教育はどう関与しているのだろうか。いくら考えても、どちらもややもやしていてすっきりしないのである。子どもの立場に立てば、「公」も「私（家庭）」も渾然とまざりあって、子どもの一日が過ぎていき、その中で自分なりの生き方を学びとっているのであって、「公」と「私」の線引きなどできないと思うのである。そんなことをしゃべな

ら言ってしまったらそれで終わってしまう。子どもに影響をもたらす「公」「私」の境界線ははっきりしなくとも、大人の立場に立てば直接担当する時間枠は確かにあるわけなので、家庭の時間枠にスポットをあてて、つまり、我が家の家庭での生活を通して感じていることを述べて、自分が「公」の場で大切にしたいと書いていることを書いてみることにする。それは、ちょっとテーマとはヒントがずれるが、「私」をふまえたうえで今、「公」に求められていることもつながっていくと思うのだが、いかがなものだろうか。

今は、春休み。母親の仕事先の幼稚園も休みに入り、我が家では、いつもの緊張感から解放され、のんびりと時を過ごしている。我が家は、出版社に勤務する夫と、今度小学校二年生になる長女、そして三歳になったばかりの長男の四人家族である。明日

は、母親の仕事がないというだけで、こんなに精神的にも、時間的にもゆとりを持つことができるものなのだ。それに比べ、普段の毎日の余裕のなさを感じ知る。惨憺たる我が家の通常の一日を思いおこして見る。

朝、五時半起床。タイマー付きの全自動洗濯機の中で、洗濯物がスタンバイしている。何はともあれ、洗濯物を干す。つぎに朝食と弁当づくり。七時、家族を起こす。それと同時に一足先に朝食を取り、七時半、家族を残し私は仕事に向かう。残された三人で朝食。八時、娘が学校に向かう。父親は、朝食の片づけとふとんたたみ。息子はその間テレビ観賞。登園と出社準備。八時五〇分、自転車にのって、保育園へ出発。息子の長い長い保育園での一日が始まる。迎えのタイムリミットである六時半まで、目一杯保育園にお世話になる。一方、娘は、放課後は、学内にある学童保育に。五時半すぎ、学童

から帰宅。母親と弟が帰宅するまで、約一時間一人で留守番。六時四十五分すぎ、母親帰宅。休む間もなく夕食準備。七時半すぎ、夕食開始。八時頃、夕食完了。一息ついて、夕食片づけ。入浴。九時すぎ、子どもたちを寝かしつける。ざっと我が家の毎日慌ただしくかように過ぎていく。

ありがたいことに、朝は、夫の仕事が比較的自由がきいて出社時間が遅くていいので、私は時間がくれば一人でオサラバと出ていけばいいので気楽であるが、夫の朝のブレッシャーは大変なものだと思う。一方、私は、家に帰ってからが、まさに時間との闘いなのだ。そうなるとこちらのペースで事を進めるので精一杯になってしまう。子どもは放ったらかしで、テレビなど適当に見させておいて、夕食準備にとりかかる。準備ができた時点で、「ご飯よ。早く仕度の手伝いをしなさい」と急ぎたてる。子どもはそう簡単には行動を転換できないでぐずぐずし

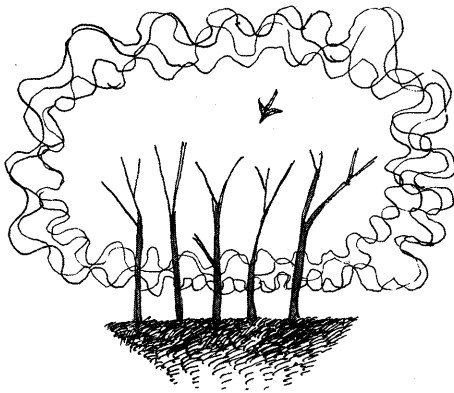
ていると、無理もないことがわかっていながら、イライラがつのり、「早くしなさい」と語調が荒くなる。食卓についてからも、言葉少なに黙々と食べ、子どもたちを食べることに専念させることばかりに気が向いてしまう。ある時、ハッとすることがある。当然知っていると置いていた食卓を飾る食べ物の名前を娘が知らなかった。忙しくても夕食は手づくりで栄養のバランスのとれたものをと、精一杯努力して作ってきたが、作るばかりに気をとられ、作った後のことが抜け落ちていた。「食べる」ということは、ただ栄養を摂取できればそれでいいのではなくって、その食べ物の名前を知り、その中の素材の歯ざわりや味を充分かみしめてはじめて「食べた」ことになるのだと思う。「これ、〇〇を煮たの。食べてみて」「この〇〇おいしいでしょう」「これ食べると、シャキシャキ言うね」そんな会話を楽しみながら食事をするゆとりがなく、折角心をこめ

て作ったもののなに、機械的に、無味乾燥に食べてきたことを多に反省した。次々とこなさなければいけない事柄に氣をとられ、我が子と共に過ごせる限られた貴重な時なのに、その時を充分に共に楽しむ余裕が悲しいかな、ないのだ。時間的制約という厳然たる事実もあるが、それだけが原因ではない。

ちょっとした気持ちの持ちようで、時の過ごし方が変わってくると思う。少しでも早くと黙々と食べるのと、食べ物の話や、今日一日のことを話しながら食べるのと、食べ終わりがどれほどちがうだろうか。そんなにちがいはしないはずである。

母親が働きながら子育てをしている家庭では、我が家と似たりよったりの日を送っているのではないだろうか。母親が仕事をしてない家庭でも、私の幼稚園に通っている親子の退園後の生活を垣間みると、絵画教室、音楽教育、プール、体操教室、公文などなどかなり忙しい生活を送っているようだ。子

育てにまつわる情報が氾濫し、教育産業も盛んな今、何もさせずに幼児期を過ごさせることを選択するには、親としてかなり勇気がいることだと思う。かくして、今日はどこどこ、明日はどこどこと連れまわす。〇〇教室には、開始時間と終了時間があ



り、ゆっくり過ぎる子どもの「時」に、否応なしに制約をもたらす。親の方もその制約に縛られて、子どもを急ぎたてる。「早くしなさい。遅刻しちゃうじゃない。もう、いつもあなたはぐずぐずしているんだから——」。どうにか時間に間にあって、親としては、ホッと一息。子どもとの貴重な時を人まかせにしておいて、なんて自分は教育熱心で、子ども思いの親なんだと自己満足。夕方、バタバタと忙しく家に帰り、子どもは放ったらかしで、夕食の準備やら家事に追われる。こんな実態が、どここの家庭でも繰り広げられているのではないだろうか。

慌ただしく過ぎていないと現代社会の流れから取り残されてしまうような強迫感に、大人の生活は蝕まれている。そのペースに否応なく子どもが巻きこまれていく。食事をつくったり、片づけたりといった煩雑なあたりまえの日常生活から子どもを排除するかたちで大人のペースを保ったり、ゆったりと

した子どもの時を親の都合で切りきざんだり……。

食事の準備をしたり、食べたり、着換えたり、片づけたり、いっしょにくつろいだり、お風呂に入ったり、寝たりする日常のありふれた生活の中で、子どもと共に時を楽しんだり、子どものちょっとしたふるまいに感心したり、子どもの目の輝きに感動したり、そういったことが、何かいつもせわしく追われているような現代生活においては、とてもむずかしくなっている。本来、毎日同じように展開されるありふれた生活の中に、無理じいをするのではなく、子どもを巻きこんで、親と子が共に生き生活をつくりだしていくのが「家庭」であり、その中で、子どもが自然と身につけていくことが「家庭教育」なのだと思う。人まかせにするのではなく、ありふれた当たり前の生活を親子で大事につくりあげていくことが、今一番心がけていかなければいけないことではないだろうか。

私の幼稚園の保護者会の時に、あるお母さんがこう話してくれた。

「幼稚園から帰る時、別に急ぐ必要もないので、この頃、バスに乗らずに、娘と二人のんびり歩いて帰るんです。すると、こんな所にこんなきれいな木があったとか、何日か前には色づいていなかった葉っぱが気がついたらしいのか色づいていたり、色々な発見があるんです。ゆっくりとそういう色々な発見を楽しみながら、娘とおしゃべりをして帰るんです。」

ありふれた日常生活の中で、子どもと向きあい、子どもといっしょにいられる時を楽しもうとして親の真摯な姿が伝わってくる。

公教育においても、子どもたちと共に生き生活する姿勢を持ち続けることが、一番大変なことである。楽しいことも、困ったことも、その全体を受けいれながら、子どもたちとの生活を楽しめたらどん

なにいいだろう。「公」「私」にわたって、こうあってほしいという気持ちが強く、どうしても子どもにそれを押しつけてしまいがちな自分を思い知らされ、昨年度一年は悶々としていることも多かった。

今もその自分自身の課題を乗りこえられた状態とは言いがたいが、前向きに、子どものありのままを受け入れ、子どもの求めているものをかえしていく努力をしていきたいと思う。そうすることで、子どもと共にあたり前の生活を精一杯生きようとする保護者を支えることができれば、と思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）